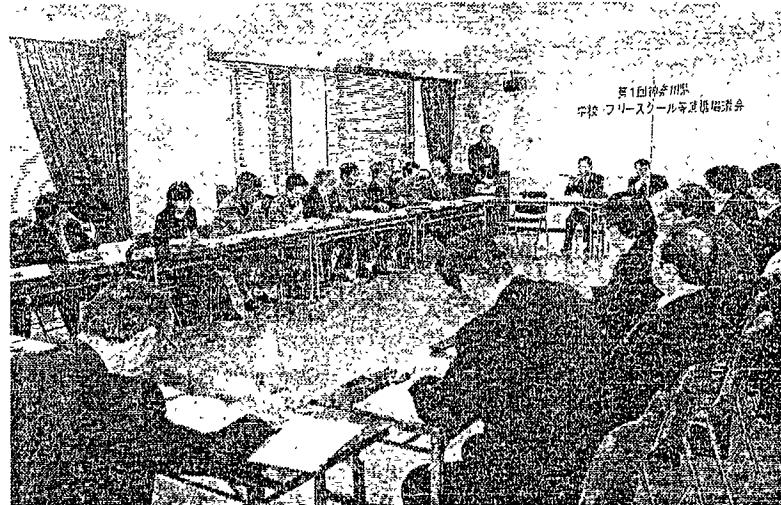


不登校対策へ連携強化



学校とフリースクールが不登校対策について話し合う協議会の初会合が十一日、横浜駅西口のかながわ農民センターで開かれ、県内の十のフリースクールの代表者らと県教育委員会などの関係者が参加した。県レベルで両者が同じテーブルに着くのは全国的にも珍しく、不登校で悩む子供たちや保護者への支援態勢充実に向けて連携を強化する。

(成田 洋樹)

県内では不登校の児童・生徒数は依然として八千人台と多い。いち早く教室に戻ることを求めるがちな学校現場と、子供たちが安心できる居場所となっているフリースクールでは連携が進んでいないのが現状とされる。そこで、相互の理解を深め場として協議会が設置された。

会長には阿久澤栄・県
学校とフリースクールが不登校対策で連携を強化するために開いた協議会の初会合がかながわ農民セ

学校とフリースクール初会合

12

の子供と向き合ってきた
保護者が体験談を話す
「不登校相談会」や個別
相談会が開かれ、関係者
約百五十人が訪れた。

教委学校教育担当部長、副会長は小田原市内の特定非営利活動法人（NPO法人）「子どもと生活文化協会」の和田重宏会長が就いた。初会合では、県内での不登校の現状や県教委の今後の事業などが報告された。

和田副会長は「フリースクールは各自が得意分野を持っており、それぞれの個性を大切にしながらの連携が必要」と強調。阿久澤会長は「両者が忌憚ない意見を出し合うことで充実した連携したい」と説明した。今後、県内を十地区に分けて設置する地区協議会では、学校とフリースクールの関係者が地域連携について具体的な方策を話し合う。

協議会後、不登校を経験した高校生や、不登校

18. 2.12

ベハウハノノトサク対策校登不

児童・生徒の不登校問題について、県内の教育委員会とフリースクールが意見を交わす「県学校・フリースクール等連携協議会」の初会合が11日、横浜市神奈川区で開かれ、県教委が、教員をフリースクールへ長期派遣し、不登校対策のノウハウを学ぶことで合意した。県教委が、NPO法人などの民間団体に教員を派遣するのは初めて。県教委は「全国的に珍しいケース」としている。

協議会には、県内のフリースクール計10団体と、県、横浜、川崎など各教育委員会担当者が出席した。

県教委によると、教員派遣は4月からスタートし、初年度は最低一人が一年間、フリースクール側で研修する。教員の入件費は、県側が負担する。教員を受け入れる団体について、フリースクール側と調整にあたる。

不登校児童・生徒の実質

フリースクールに 教員を1年間派遣

県教委

生徒を対象とした教育カリキュラムの開発をフリースクールへ委託する」とや、県内のフリースクールの活

新聞 日朝

教員を1年間派遣へ

県教委

県教委は4月から、不登校児童・生徒の学習を支援する「フリースクール」に教員を研修として1年間派遣する。11日、

横浜市神奈川区で開かれた「第1回県学校・フリースクール等連携協議会」で明らかにされた。

県職員をフリースクールに短期派遣する例はこれまであったが、教員を長期派遣するのは初めて

といふ。

5年以上の勤続経験がある30~40代の教員の中から県教委が1人を選び、フリースクールのスタッフとして派遣。不登校の児童や生徒に接したり運営を学んだりして、

動内容が一覽できるホームページを作成することでも一致した。

引地孝一・県教育長は、フリースクールへの教員派遣について、県教委の大友英司・生徒指導担当課長

は「不登校者は微妙な環境

変化にも敏感なので、教

員の受け入れについては、

さしつけ、フリースクール側

からも「それぞれの得意分

野があるので個性を失わ

に向減つておらず、新た

ただ。

次いだ。

、知識を共有したい」な

ページを作成することでも

ど、連携に積極的な声が相

次いだ。

、連携に積極的な声が相

フリースクールへの理解園」(横浜市港北区)のを深めるのが目的。受け入れ先となるフリースクールはまだ決まっていない。

協議会の委員を務めるNPO法人「楠の木学

会」で明確にされた。

授業を進める、集団を動かすなどの課題はなく、子どもたち一人ひとりに合わせて予定が変わることもしばしば。受け入れ側としては、学校の先生にいかに「課題からの自由」に慣れてもらうかが重要だ」としている。

授業を進める、集団を動かすなどの課題はなく、子どもたち一人ひとりに合わせて予定が変わることもしばしば。受け入れ側としては、学校の先生にいかに「課題からの自由」に慣れてもらうかが重要だ」としている。

授業を進める、集団を動

かすなどの課題はなく、

子どもたち一人ひとりに

合わせて予定が変わること

もしばしば。受け入れ

側としては、学校の先生

にいかに「課題からの自

由」に慣れてもらうかが

重要だ」としている。